

令和8年 3月2日	農作物病害虫発生予報 3月	山口県病害虫防除所
--------------	--------------------------------	-----------

～目次～

I	予報の概要	1
II	予報	
	【主要病害虫】	2
	【その他の病害虫】	10
III	参考(予報の見方、気象予報)	11

I 予報の概要

作物名	病害虫名	予想発生量	現況	
			平年比	前年比
果樹全般(ウメ、モモ、ビワ等)	カメムシ類(チャバネカメムシ、ツヤアカメムシ、クサギカメムシ)	多	多	多
タマネギ	べと病	平年並	平年並	前年並
	白色疫病	平年並	平年並	前年並
イチゴ	灰色かび病	やや少	やや少	多
	うどんこ病	少	少	前年並
	アブラムシ類	多	多	前年並
	ハダニ類	平年並	平年並	前年並
	アザミウマ類	やや多	やや多	多

お問い合わせ先
山口県農林総合技術センター(山口県病害虫防除所)
TEL (0835)28-1211 (代)
FAX (0835)38-4115
E-mail a172011@pref.yamaguchi.lg.jp

II 予報

【主要病害虫】

果樹全般（ウメ、モモ、ビワ等）

1 カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
多	多	多	—

(2) 予報の根拠

ア クサギカメムシの隙間トラップによる越冬量調査(10か所)では、1トラップ当たり88.9頭(平年30.2頭)で平年に比べ多かった(+)。

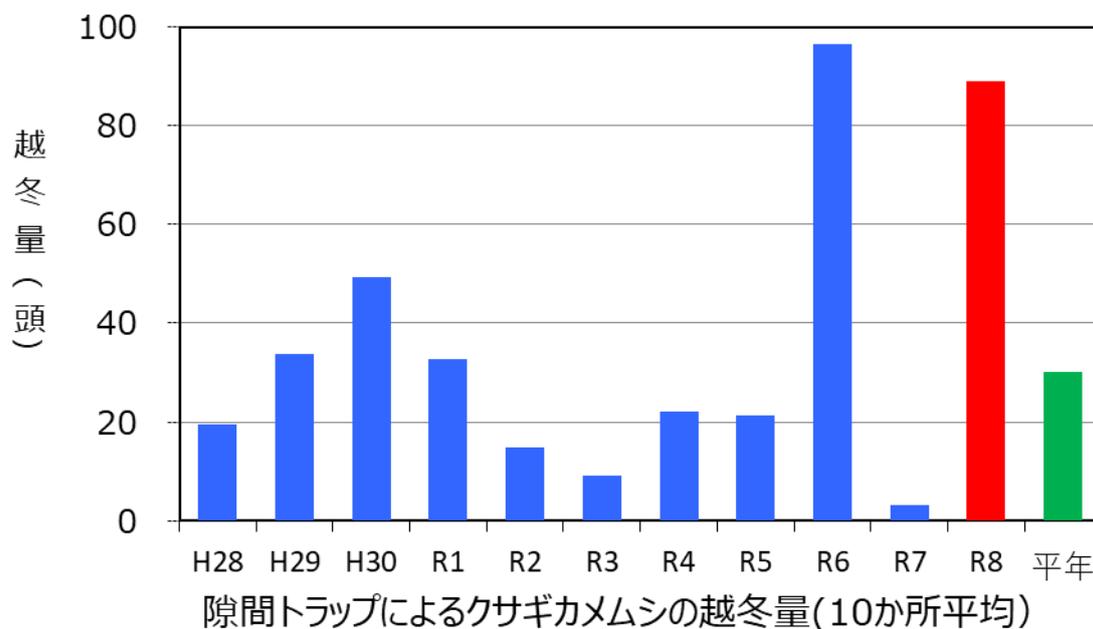
イ 果樹カメムシ類の越冬量と相関の高い前年のスギ、ヒノキの花粉飛散量は平年に比べ多かった(+)。

ウ 気象予報では、3月の気温は高い(+)。

(3) 防除対策

<防除判断>

3月の気温が高く、越冬成虫の活動が早まる可能性があるため、ウメ、モモ、ビワ等で被害を受けることの多い園では、果樹園への飛来状況の把握に努める。



タマネギ

1 ベと病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	発生前または発病初期

(2) 予報の根拠

- ア 2月下旬の巡回調査では、発生ほ場率0%(平年3.6%)、発病株率0%(平年0.4%)で平年並みであった(±)。
- イ 1a当たり調査では、越年り病株の発生ほ場率0%(平年8.6%)、発病株数0(平年1.5)であった(-)。
- ウ 気象予報では、3月の気温は高い、降水量はほぼ平年並(±)。

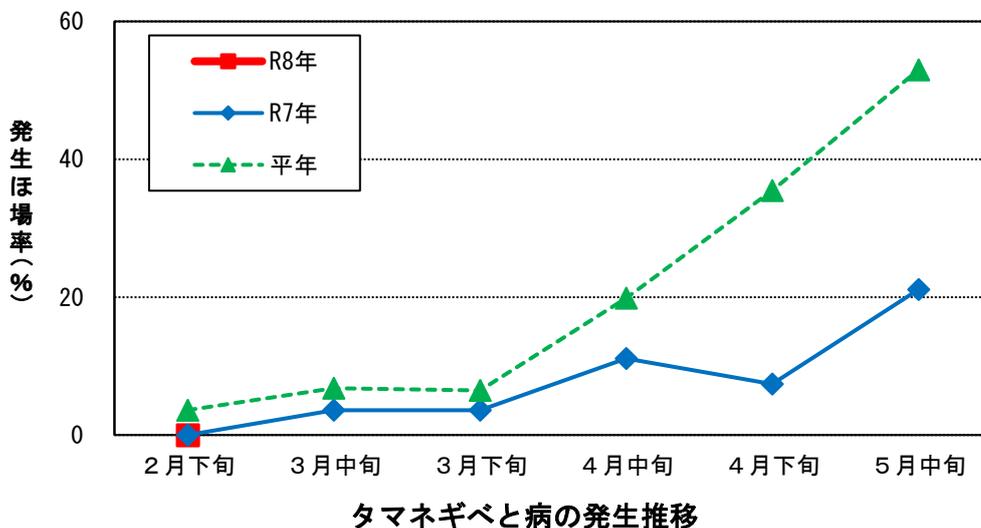
(3) 防除対策

<耕種的防除等>

- ア 越年り病株の発病は4月頃まで発生するため、こまめにほ場を見回り、早期発見に努める。越年り病株を見つけた場合は直ちに抜き取り、ほ場外に持ち出すとともに、ビニール袋等に密閉するか土中に埋める等適正に処分する。
- イ ほ場の排水を良好にする。

<防除のポイント>

- ア マンゼブ剤(殺菌剤コードM03)、フルアジナム剤(殺菌剤コード29)等の保護殺菌剤で、定期的な予防防除を実施する。
 - イ 越年り病株、二次感染株が認められた場合は、直ちに治療効果のある薬剤(殺菌剤コード4, 11, 40等)で防除を行う。
 - ウ 薬剤耐性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。
- ※本病に登録のある薬剤は混合剤が多いことから、同一成分の使用回数を超えないよう、必ず成分、殺菌剤コード及び散布記録等を確認してから使用する。



2 白色疫病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	発病初期

(2) 予報の根拠

ア 2月下旬の巡回調査では、発生ほ場率0%(平年3.6%)、発病株率0%(平年0.8%)で平年並みであった(±)。

イ 1a当たり調査では、発生ほ場率0%(平年5.0%)、発病株数0(平年8.0)であった(-)。

ウ 気象予報では、3月の降水量はほぼ平年並(±)。

(3) 防除対策

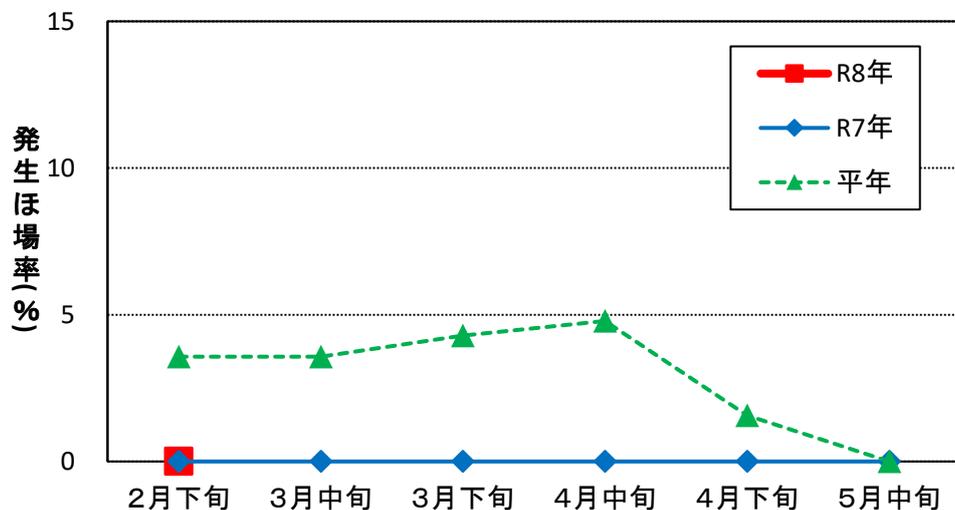
<耕種的防除等>

ほ場の排水を良好にする。

<防除のポイント>

ア ほ場の見回りを行い、発生を確認した場合は、治療効果がある薬剤(殺菌剤コード4、40及び43を含む薬剤)で直ちに防除を行う。

イ 薬剤散布後は防除効果を確認し、その後も発生が認められる場合は、系統の異なる薬剤で追加防除を行う。



タマネギ白色疫病の発生推移

イチゴ

1 灰色かび病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	やや少	多	発生初期

(2) 予報の根拠

ア 2月下旬の巡回調査では、発生ほ場率5.0%(平年14.4%)、発病株率0.1%(平年1.5%)、発病果率0.0%(平年0.4%)で平年に比べやや少なかった(ー)。

イ 気象予報では、3月の気温は高い、降水量はほぼ平年並(±)。

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

ア 多湿条件で発病が助長されるため、換気等により施設内が多湿にならないよう努める。

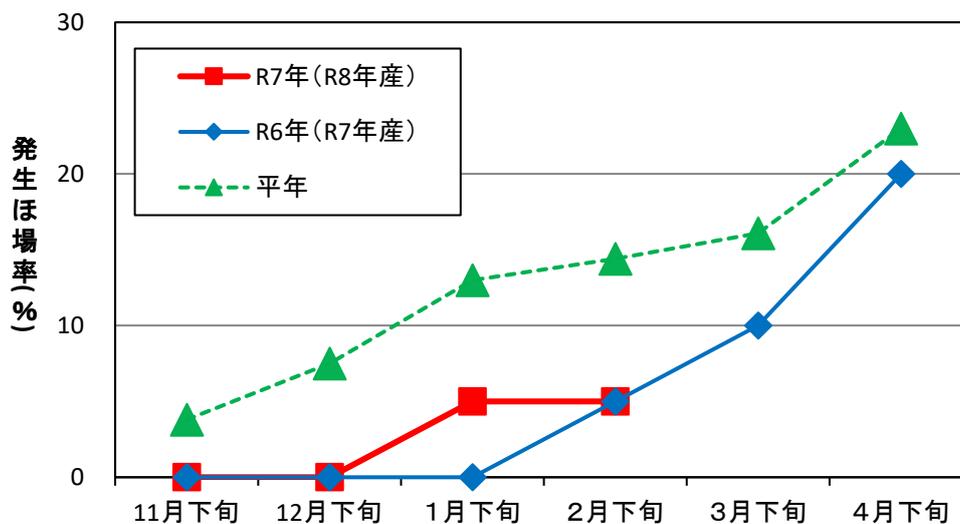
イ 被害果等は伝染源となるので、早期に取り除き、ビニール袋等に密封してほ場外に持ち出し、焼却や土中に埋めるなど適正に処分する。

ウ 窒素過多による軟弱、過繁茂な生育が発生を助長するため、適正な施肥管理に努める。

<防除のポイント>

ア ベンゾイミダゾール系剤(トップジンM)、ジカルボキシイミド剤(スミレックス、ロブラール)、SDHI剤(アフェット、カンタス)、QoI剤(アミスター)及びポリオキシシン剤は耐性菌が出現しているため、薬剤散布後に防除効果が劣る場合は他の薬剤を使用する。

イ 薬剤耐性を発達させないため、同一系統薬剤の連用は避ける。



イチゴ灰色かび病の発生推移

2 うどんこ病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
少	少	前年並	発病前または発病初期

(2) 予報の根拠

ア 2月下旬の巡回調査では、発生ほ場率0%(平年9.5%)、発病株率0%(平年0.8%)、発病葉率0%(平年0.1%)、発病果率0%(平年0.1%)で平年に比べ少なかった(一)。

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

被害果や被害葉は伝染源となるので、施設外に持ち出し適正に処分する。

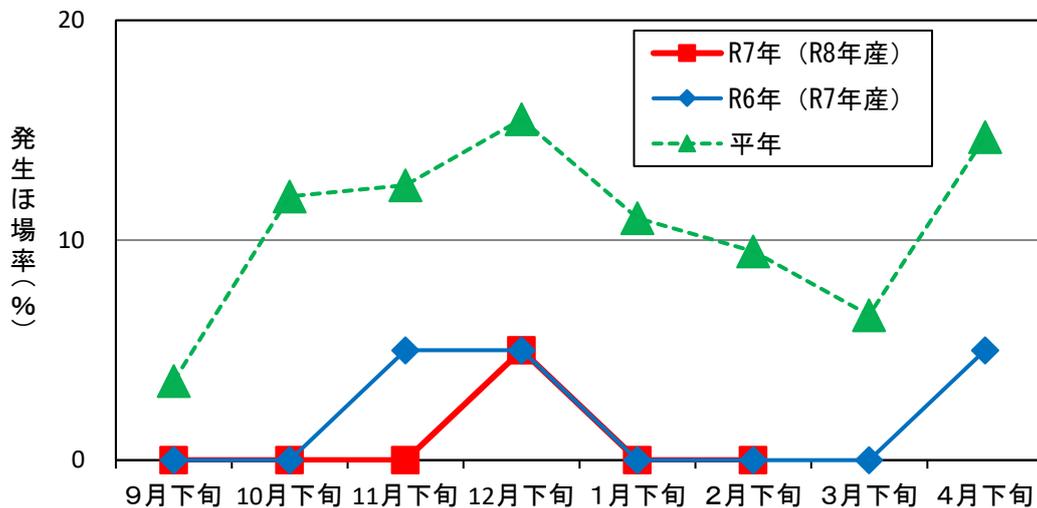
<防除のポイント>

ア 本病は、発病初期には葉裏に発生しやすいため、葉裏をよく確認し、早期発見に努める。

イ 予防防除と発病初期の防除に重点をおき、薬液が葉裏や新芽にも十分かかるよう、古葉を除去して丁寧に散布する。

ウ 薬剤散布後は防除効果を確認し、その後も発生が認められる場合は、約7日おきに1～2回薬剤を追加散布する。また、アズキシストロビン剤(アミスター)は耐性菌が出現しているため、効果が劣る場合は他の薬剤を使用する。

エ 薬剤耐性を発達させないため、同一系統薬剤の連用は避ける。



イチゴうどんこ病の発生推移

3 アブラムシ類

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
多	多	前年並	発生初期

(2) 予報の根拠

ア 下旬の巡回調査では、発生ほ場率35.0%(平年18.5%)、寄生株率13.9%(平年2.6%)で平年に比べ多かった(+)。

イ 気象予報では、3月の気温は高い(+)

(3) 防除対策

<防除のポイント>

ア 現在、多発しているほ場では、速やかに防除を実施する。

イ 薬剤散布時は、葉裏までムラなくかかるよう十分な量の薬液を散布する。

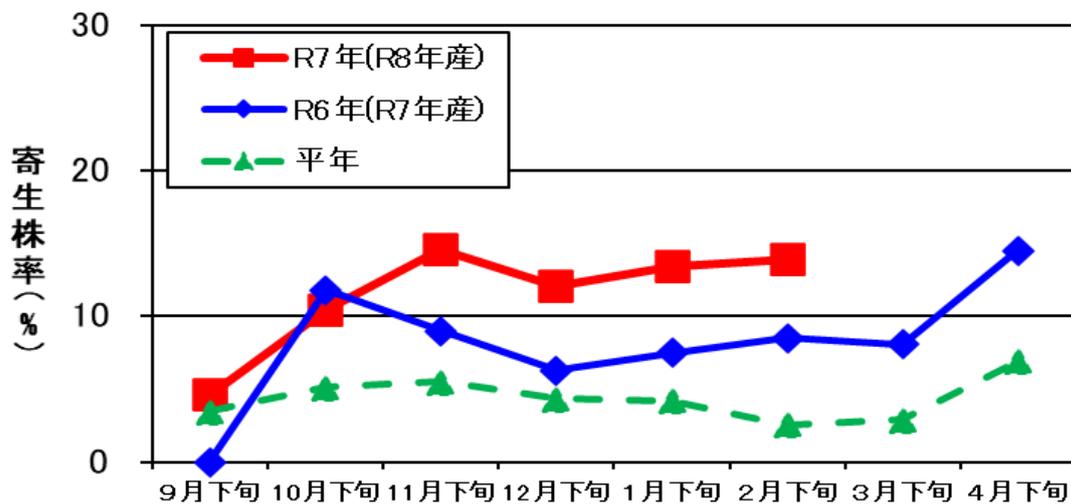
ウ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

エ 薬剤散布を行う場合は、ミツバチに影響の少ない薬剤を使用する。

オ ハダニ類の天敵(ミヤコカブリダニ、チリカブリダニ)を放飼している場合は、影響の少ない薬剤(サフオイル、ウララ、コルト、ベネビア等)を使用する。

(山口県農作物病害虫・雑草防除指導基準ーミツバチの訪花活動に対する農薬の影響を参照)

(<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/uploaded/attachment/217377.pdf>)



イチゴのアブラムシ類の発生状況

4 ハダニ類

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	発生初期

(2) 予報の根拠

ア 下旬の巡回調査では、発生ほ場率40.0%(平年43.5%)、寄生株率13.8%(平年14.8%)で平年並みであった(±)。

イ 気象予報では、3月の気温は高い(+)

(3) 防除対策

<防除判断>

ア ハダニ類は体長が0.5mm程度と小さく確認しにくいので、ルーペを使用して葉裏を確認する必要がある。

イ 摘除した下葉10枚程度を白い紙袋に入れ、室内に1日おくと翌日にはハダニは新鮮な葉を求めて移動し、紙袋の上部に集まるため容易に観察できる。

ウ ハダニ類は部分的に発生することがあるので、ほ場全体をよく観察し、発生を認めたら直ちに防除を行う。

<防除のポイント>

ア 薬剤防除の前には、薬剤が葉裏まで十分かかるように下葉を除去する。また、除去した下葉は、ほ場外に持ち出し適正に処分する。

イ 気門封鎖剤を使用する場合は、その多くがハダニ類の卵には効果が低く、残効性がないため、7～10日間隔で散布する。

ウ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。化学農薬に対する抵抗性が発達しているため、散布後に効果を確認し、十分な効果が認められない場合は、気門封鎖剤を中心に防除を行う。

エ 天敵(ミヤコカブリダニ)を利用している場合は、次のことに注意して使用する。

(ア) 天敵に影響の少ない薬剤(マイトコーネ、ダニコング、スターマイト、ダニオーテ等)を使用する。

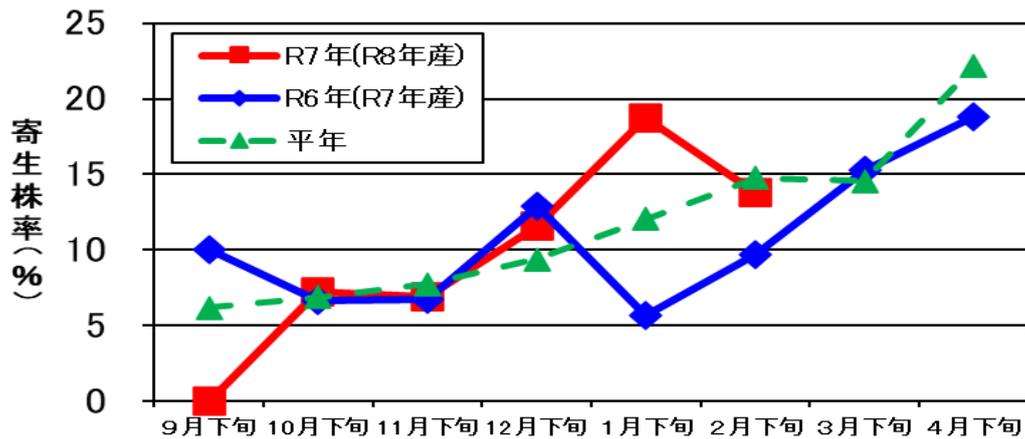
(イ) 硫黄のくん煙は1日2時間程度とする。

※ 放飼方法、放飼後の管理についてはメーカーホームページを参照

オ 開花期以降の薬剤散布は、ミツバチに影響の少ない薬剤を使用する。

(山口県農作物病害虫・雑草防除指導基準—ミツバチの訪花活動に対する農薬の影響を参照)

(<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/uploaded/attachment/217377.pdf>)



イチゴのハダニ類の発生推移

5 アザミウマ類

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	多	発生初期

(2) 予報の根拠

- ア 下旬の巡回調査では、発生ほ場率55.0%(平年25.0%)、寄生花率3.2%(平年1.9%)で平年に比べやや多かった(+)。
- イ 気象予報では、3月の気温は高い(+)。

(3) 防除対策

<防除判断>

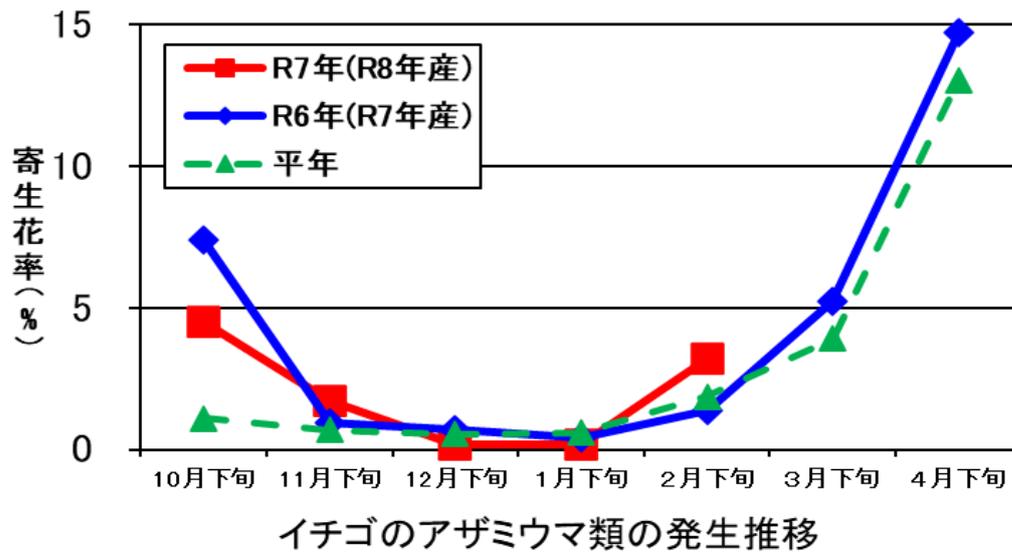
- ア 気温が高くなると施設外からの侵入が増加し、施設内でも急激に増殖するため、こまめにほ場を見回り、寄生花率が10%を超えている場合には、直ちに薬剤を散布する。
- イ アザミウマ類は体長2mm程度と小さく、花の中に潜っているため、息を吹きかけてルーペ等で確認する。

<防除のポイント>

- ア 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。化学農薬に対する抵抗性が発達しているため、散布後に効果を確認し、十分な効果が認められない場合は、他系統の剤に変更し、再度防除する。
- イ 天敵・訪花昆虫に影響の少ない脱皮阻害剤(IGR剤、IRAC:15)は、幼虫の生育を阻害し、成虫は未ふ化卵を産むため次世代の発生を防止できる。
- ウ 薬剤散布を行う場合は、ミツバチに影響の少ない薬剤を使用する。

(山口県農作物病害虫・雑草防除指導基準－ミツバチの訪花活動に対する農薬の影響を参照)

(<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/uploaded/attachment/217377.pdf>)



【その他の病害虫】

作物名	病害虫名	予想発生量	現況		発生ほ場率		備考
			平年比	前年比	本年 (%)	平年 (%)	
イチゴ	菌核病	平年並	平年並	前年並	0	0	発病茎葉、発病果は除去する。
	コナジラミ類	少	少	前年並	0	19.8	

Ⅲ 参考

1 予報の見方

(1) 病虫害発生量の基準（原則として過去10年間の発生量と比較）

ア 平年比

多	やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多	平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並	平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少	平年並の外側20%の度数の入る幅
少	やや少ないの外側10%の度数の入る幅

注：過去の発生量との比較を表わすもので、被害や防除の必要性とは異なる）

イ 前年比

多	平年比の5段階評価で区分し、前年の評価より多い発生
少	前年の評価より少ない発生
前年並	前年の評価と同等の発生（上記2項目を除くもの）

(2) 病虫害発生時期の基準（原則として過去10年間の発生時期と比較）

早い	過去10年間の平均値より6日以上早い
遅い	より6日以上遅い
やや早い	より3～5日早い
やや遅い	より3～5日遅い
平年並	を中心として前後2日以内

注：ウンカ類は1971年以降、コブノメイガは1985年以降の初確認日と比較（半旬毎）

(3) 予報根拠における発生要因の評価基準

+	発生を助長する要因
±	発生の助長及び抑制に影響の少ない要因
-	発生を抑制する要因

2 気象予報

(1) 概要

1か月気象予報（2月26日福岡管区气象台発表）

予報	低い (%) 少ない	平年並 (%)	高い (%) 多い
気温	20	30	50
降水量	40	30	30
日照時間	20	40	40

週ごとの気温傾向

予報	低い (%)	平年並 (%)	高い (%)
1週目	10	10	80
2週目	30	50	20
3～4週目	30	30	40